

# 日日研が求めているもの

庵 功雄(一橋大学国際教育センター)

[Isaoiori AT courante.plala.or.jp](mailto:Isaoiori AT courante.plala.or.jp)

<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/>

# 1. はじめに

- この研究会は、「日本語学と日本語教育をつなぐもの」として設立されました。
- この発表では、この研究会が求めている研究を4つのタイプに分けて紹介します。

# 1. はじめに

- この発表の構成
- 日本語教師の方へ→2
- 日本語非母語話者の方へ→3
- 大学院生の方へ→4
- みなさんへ→5

## 2. この形式は本当に使うかな？

- 現場で教えていて、「この形式は本当に使うかな？この形式は要らないんじゃないか？」と思ったところから出発するもの。
- → **日本語教師の方へ**

## 2. この形式は本当に使うかな？

- 庵 功雄(1995)「ガ～シタイとヲ～シタイ」『日本語教育』86
- 約20年前に書いたもの。
- 当時は、「～シタイの前が他動詞のときは、ヲをガに変える」という規則が日本語の教科書に書かれていた。
- しかし、次のような例でヲをガに変えると非常に不自然に感じられます。その逆に、ガをヲに変えると不自然になるという例はほとんど見なかった。
- (1) 誕生日に限らず、できるだけ楽しい気分で
- 毎日を(?? が)過ごしたい。
- (2) お互いの気持ちを(??が)確かめたかったただけなんだ。

## 2. この形式は本当に使うかな？

- 庵 功雄(1995)「ガ～シタイとヲ～シタイ」『日本語教育』86
- この論文は、当時入手可能なコーパスを使って、この直感を検証したもの。
- →「食べる、飲む」以外の全ての動詞で、ヲがガよりも圧倒的に多く使われており、ガの用例がある動詞はごく一部で大部分の動詞ではヲの用例しかないことがわかった。

## 2. この形式は本当に使うかな？

- 庵 功雄(2009)「推量の「でしょう」に関する一考察」『日本語教育』142(2009年度日本語教育学会林大記念論文賞受賞)
- これは、非母語話者の会話や、ゼミ生からもらったメールなどで気づいた誤用例を論文化したもの。
- (3) 教師：田中君、どこにいるか知らない？  
学生：図書館??でしょう(okだと思います)。
- (4) (奨学金免除の書類の締切を訪ねた私のメールへの返信)  
締切は金曜日です。水曜日までにいただければ  
いい??でしょう(okと思います)。
- 「でしょう」は「**カチンとくる誤用**」(野田尚史)になる。「と思います」なら問題ない。

## 2. この形式は本当に使うかな？

- 庵 功雄(2009)「推量の「でしょう」に関する一考察」『日本語教育』142(2009年度日本語教育学会林大記念論文賞受賞)
- この論文では、「でしょう」が「カチンとくる」誤用になる理由を、コーパス調査、教科書調査、文献調査を経て論文化した。



### 3. この言い方は母語の影響なのでは？

- 誤用例に接したときに、それが母語の影響ではないか考えてほしい。
- 母語話者にとってのJapanese Language: 日本語
- 非母語話者に見えているJapanese Language: ニホン語
  - (白川2002、庵2013)
- → 日本語教育文法にとって重要なのは「ニホン語」。
- → 日本語教育文法に適しているのは日本語非母語話者。
- → 日本語非母語話者の方へ。

### 3. この言い方は母語の影響なのでは？

- 張 麟声(2001b)「「(の)中」の基本的意味とその分布について」『日本語教育』108
- 張 麟声(2001a)『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
- (5) 母はキッチン\*の中(ok<sub>φ</sub>)にいます
- (6) 学校\*の中(ok<sub>φ</sub>)でお前は立派な学生のようにだが、家では全然だめだ。(張2001a)
- →こうした誤用が生じる理由を、日本語の「の中」と、中国語の「里」の「ずれ」から説明する。

### 3. この言い方は母語の影響なのでは？

- 張 麟声 (2001b) 「「(の)中」の基本的意味とその分布について」『日本語教育』108

「N+(の)中」の役割		諸 ケ ー ス		「(の)中」の分布		
				必須	任意	不可
①	ソース・ゴール 及び存在場所	一般的空間名詞			○	
		キッチン類名詞				○
②	動作の場所	普通人が入れない容器類の名詞		○		
		人が入れる空間の名詞			○	
		キッチン類名詞				○
③	存在物 が人間	建築物 名 詞	普通の場合		○	
			特に内側のイメージを出す	○		
			キッチン類名詞			○
	存在物 がもの	非建築物名詞		○		
		存在空間・存在物関係が了解されやすい			○	
		存在空間・存在物関係が了解されにくい		○		
④	移動の経路			○		
⑤	目的語	動作の対象が一義的に物体の内部			○	
		そうではないケース		○		
⑥	叙述の対象	動作の対象が一義的に物体の内部			○	
		そうではないケース		○		

### 3. この言い方は母語の影響なのでは？

- 陳 昭心(2009)「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」『世界の日本語教育』19
- 結果残存(結果の状態)のテイル形は中国語話者にとって産出が難しく、中国語話者はテイル形の代わりに夕形を使うことが多いことは広く知られていた。
- (7) (部屋に入って)あっ、窓ガラスが
  - ??割れた(ok割れている)。
- (8) (スカートを試着しようとしてファスナーの不具合に気づいたとき)
  - すみません。ファスナーが
  - #壊れました(ok壊れています)。(黄・井上2005)

### 3. この言い方は母語の影響なのでは？

- 陳 昭心(2009)「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』19
- しかし、中国語話者の誤用にはこれ以外のものがある。
- (9) (家に帰ったとき母が言う) お帰り。お客さん
  - ?いる (ok 来て(いる)) よ。
- (10) (路上でさいふを発見して) あっ、財布が
  - ??ある (ok 落ちて(いる)) !
- →これらは、中国語の存在文の転移ではないか。
- →非母語話者に見えている日本語(ニホン語)の記述。
- →ブラジル・ポルトガル語話者にも同様の現象が見られる
  - (トッフオリ2016)。

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 研究上の「常識」を知っておくことは(日本語教育においても)重要。
- しかし、**それだけでは新しい研究にはつながらない。**
- こうした「常識」を将棋や囲碁では「定跡／定石」と言うが、将棋や囲碁のトップ棋士たちはこうした「常識」を知り、それを越えるものを作り出している。同じことが研究にも当てはまる。
- → **日本語教育の経験が少ない、モノリンガルの大学**
- **院生の方へ**

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 杉村 泰(2013)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—人為的事態の場合」『日本語／日本語教育研究』4
- 類例を作り、アンケート調査を行う。
- →日本語母語話者と中国語話者の判断が一致する場合とずれる場合がある。
- →日本語教育にとっても重要な示唆。
- →「常識」を知り、そこから一步先に出ることを考える。

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 杉村 泰(2013)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—人為的事態の場合」『日本語／日本語教育研究』4
- 開けにくいふたを開けることができたとき、日本語母語話者は(11)のように言うのに対し、中国語話者は(12)のように言う、ということはよく知られている。
- (11) あっ、開いた！
- (12) あっ、開けた／開けられた！
- →研究の「常識」。



## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 杉村 泰(2013)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—人為的事態の場合」『日本語／日本語教育研究』4
- 次のような場合、「常識」では自動詞が使われるはずだが、(13)のような自動詞は座りが悪く、(14)のような他動詞の方が適切。
- (13) さあ、ケーキが?切れたから、食べよう。
- (14) さあ、ケーキをok切ったから、食べよう。
- →「常識」の一步先に行くことが必要。

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 井本 亮(2015)「連用修飾関係「大きくV」について」『日本語／日本語教育研究』6
- (17)のような「大きく」はこうした研究ではあまり取り上げられていない。
- (17)このことは結果に大きく影響するだろう。
- (18)このあたりの風景はこの10年で大きく変わった。
- →コーパス調査、学習者の理解度調査、難易度調査を行う。
- →(17)(18)のタイプは頻度が高いにもかかわらず、日本語教育であまり扱われていないため、学習者の理解度が低い。
- →日本語学の「結果の副詞／様態の副詞」の分類は日本語教育では有用ではない。

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 井本 亮(2015)「連用修飾関係「大きくV」について」『日本語／日本語教育研究』6
- 研究の立場とは別に、日本語教育の現場に身を置き、**学習者にとってどのようなことが必要かということ**を**考える**中でこうした結論に至ったと考えられる。
- →**発表者が考える日本語教育文法のあり方。**

## 4. 「研究の常識」を疑ってみよう

- 注意して欲しいこと
- 記述的／理論的研究を日本語教育系の雑誌(本誌を含む！)に投稿する際の注意
- 「この研究は日本語教育の役に立つ(はずだ)」ということは(根拠がない限り)絶対に書くべきではない。

## 5. 「この違いは何だろうか？」について考えてみよう

- 最後は、みなさんに可能なタイプの研究について考える。

## 5. 「この違いは何だろうか？」について考えてみよう

- 陳 昭心(2011)「「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点」『日本語／日本語教育研究』2
- 「忘れる」は使い方が難しい動詞。
- (19) (好きなテレビ番組の開始時間が近づいていることに気づいて) 忘れて(い)た／??忘れた！(と急いで帰る)
- (20) (宿題をカバンに入れていなかったことに学校で気づいて)?忘れて(い)た／忘れた！
- 特に、中国語では(19)(20)が同じ形になるため、中国語話者にとって難しい(ただし、この使い分けはかなり多くの言語の話者にとって難しいかもしれない)。

## 5. 「この違いは何だろうか？」について考えてみよう

- 陳 昭心(2011)「「忘れた」と「忘れていた」の使い分けに関する指導上の留意点」『日本語／日本語教育研究』2
- →アンケート調査によって、台湾人中国語話者と日本語母語話者のズレを調べた上で、適切な指導を行うために必要な条件を考察している。
- →この論文のポイントは、(19)(20)のような例に気づくかどうか。
- →そのためには、周りで使われている日本語に常に耳をすましておくことが重要。

## 5. 「この違いは何だろうか？」について考えてみよう

- 阿部二郎(2015)「引用句内におけるコピュラの非出現について」阿部二郎・庵 功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 引用の「と」の前にコピュラが入るかは自由変異 (free variation) のように見える。
- (21) あ的那个人はアメリカ人 {  $\phi$  / だ } と**思う**。
- (22) あ的那个人はアメリカ人 {  $\phi$  / だ } と**見える**。
- コーパス調査の結果：
  - 「**と思う**」ではコピュラが出る割合が高く、「**と見える**」ではコピュラが出ない割合が高い。



## 5. 「この違いは何だろうか？」について考えてみよう

- 阿部二郎(2015)「引用句内におけるコピュラの非出現について」阿部二郎・庵 功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 「と思う」と「と見える」の違い
- →「場の二重性」(砂川1987)の違い(「と思う」の補文には判断があるが、「と見える」にはそれがない)
- →自由変異ではなく、**違いには理由がある。**

## 6. おわりに

- この発表では、4つのタイプに分けて、「日日研が求めている研究」についてお話ししました。
- 今回取り上げた現象は、日本語を教えたり、研究したりしている方にとってはなじみのあるものばかりだと思います。
- そうしたなじみのある現象をいかに研究の場に持ってくることができるかにつながる方策として、次のことを挙げたいと思います。

## 6. おわりに

- (23) 常に「説明」を考える。
- 理解することは相対的に言えば、簡単。
- しかし、そのことを他人(学生を含めて)に説明することは簡単ではない。
- 自分が明日取り上げる文法項目、語彙項目その他について、「何を聞かれても大丈夫」という状態を作ることを目指して「シャドーピッチング／ネタ繰り」を繰り返す中で、多くの気づきが得られる。

## 6. おわりに

- (23) 常に「説明」を考える。
- 優れた芸人の最大の資質は、常に芸のことを考えられること。酒井(2006)の「運・鈍・根」というのも同じ(cf. 庵2013)。
- 研究のネタは至る所に転がっている。
- それを見つけられるか否かは、それを見つけるための努力を続けるか否かにかかっている。

# 参考文献

- 庵 功雄(2010)「アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, pp.41-48, 日中言語文化出版社
- 庵 功雄(2013)『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵 功雄(2015b)「中国語話者の母語の知識は日本語学習にどの程度役立つか」『漢日語言対比研究論叢』7, pp.165-173, 漢日対比言語学研究会
- 庵 功雄(2016印刷中)「これから求められる文法研究」『日中言語研究と日本語教育』9, 好文出版
- 稲垣俊史(2013)「テイルの二面性と中国語話者によるテイル習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』4, pp.29-41, 日中言語文化出版社
- 黄 麗華・井上 優(2005)「対照研究と日本語教育」松岡弘・五味政信編『日本語教育の開かれた扉』スリーエーネットワーク
- 酒井邦嘉(2006)『科学者という仕事』中公新書
- 白川博之(2002)「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』31-4, pp.54-59, 大修館書店
- 砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能」『文芸言語研究 言語篇』13, pp.73-91, 筑波大学
- トッフオリ, ジュリア(2016)「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向に関する一考察」『2016年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.158-163

**ご清聴ありがとうございました**